サーリネンの初期活動における設計競技の役割

フィンランドの建築家エリエル・サーリネンの作品に関する研究 その1

THE FUNCTION OF DESIGN COMPETITIONS
ON SAARINEN'S EARLY ACTIVITIES

A study on the works of Eliel Saarinen, Finnish architect Part 1

伊藤 大介*

Daisuke ITO

The early activities of Eliel Saarinen (1873-1950), architect of Jugend-period in Finland, was supported by the design competition system. Their office became the leader in an instant, because of their win in several competitions. Through the competition for Tallberg's house (1896-97), Saarinen got the chance to design for Helsinki in cooperation with J. Tallberg, the enterpriser. The competition for Finnish pavilion for Paris World Fair (1898) meant to him the first step toward the central figure of National Romantic Architecture. Saarinen's two tendencies, i.e. modernism and nationalism, were both cultivated by the competitions of Jugend-period.

Keywords: *Eliel Saarinen, Helsinki, National Romantic Architecture, design competition*
エリエル・サーリネン、ヘルシンキ、ナショナル・ロマンティシズム建築、設計競技

1. 序

本論は、建築家エリエル・サーリネン Eliel Saarinen (1873~1950) のフィンランド期の活動 (1896~1923) に関する研究の一部をなすものである。

サーリネンは、ユーゲント Jugend 期¹⁾ (1895~1915 頃) を中心に活動したフィンランド人建築家のなかでは、対外的にも比較的良好に知られている存在だと言ってよからう。ただし、その大きな理由は、彼が後半生をアメリカで過ごし、そこでの活動が大きな影響力をもった点にある。そして、この視点に単純に従うと、片寄りをもったサーリネンの建築家像が形成される可能性がある。すなわち、フィンランドでの活動を通じて、唯一1919年に最終的に完成したヘルシンキ駅によって20世紀初頭の駅舎建築に名を残した建築家、そして1922年のシカゴ・トリビュン社設計競技で注目されて翌年にアメリカに移住してクランブルック・アカデミーでの教育活動を通じて各国から集まる建築家らに多大な影響を与え、近代建築の確立に一定の役割を果たした建築家、といったサー

リネン像である。実際、彼がヘルシンキ駅以前にフィンランドでナショナル・ロマンティシズムの中心的建築家として民族主義的な建築表現の創出に果たした役割、および当時急激な発展膨脹期を迎えていた都市ヘルシンキの近代的住環境形成や中心商業地区再開発に果たした役割などは、フィンランド以外の国ではほとんど注目されてこなかった。

サーリネンの位置づけに関して、これを既往研究との関連で見てみるなら、晩年の存命中のサーリネン自身がフィンランド本国以外でなされる片寄った評価をむしろ望んでおり、それが研究にも一定の影響を与えていた可能性が指摘できる。アメリカでのサーリネンは、ヨーロッパ辺境の小国で活動した建築家としてよりも、いわば世界を視野に入れていた建築家として位置づけられることを望んだのだといえよう。1948年に刊行され長らくサーリネン研究の基礎的文献とされてきたクリストジャーナー著の研究書『エリエル・サーリネン：フィンランド系アメリカ人の建築家・教育者』²⁾は、おそらくこうし

* 北海道東海大学国際文化学部国際文化学科
助教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of International Cultural Relations, School of
International Cultural Relations, Hokkaido Tokai University,
Dr. Eng.

た当人の意向も反映して、分析作品が選択されていた。

1980年代以降のサーリネン研究の進展とともに、アメリカ期の活動と並行してフィンランド期の活動にも、より客観的な評価が与えられる基盤が整ってきている。両国が協力して企画された大規模なサーリネン展が1983～84年にアメリカとヨーロッパ各地で巡回開催され、これに際してヘルシンキの国立建築博物館が中心となって組織したサーリネン研究プロジェクト・チームによる大部の研究書³⁾がやや遅れたが公刊された。特にこの巻末に掲載されているヴァルト編のフィンランド期のサーリネン全作品リスト（以下「作品リスト」とする）は非常に詳細に渡り、今後のサーリネン研究に十分な基礎データを提供できるよう意図されている⁴⁾。今後進めてゆく一連のサーリネン研究では、こうした研究状況の進展を踏まえて、アメリカあるいはヨーロッパ側からの視点ではなくフィンランドの国内的な視点から、彼を取りまく当時の建築界の動向にも目を配りつつ、フィンランド期の活動と作品に検討を加えてゆく。

特に本論では、サーリネンが建築家としての活動を開始するのを可能にした要因のひとつとして、当時のこの国の設計競技制度に着目してゆく。ユーゲント期のフィンランド建築界を国内的な視点で見ると、ナショナル・ロマンティズムと称される理念が非常に重要な意味をもっていた。しかし理念を論じる際は、それが建築家を衝き動かすものとして強烈であればあるほど、すべてをその理念に結びつけて捉えてしまう危険性をはらむ。一方で、より実証的な建築家の活動を支える裏づけについて論じることも重要であろう。その意味で、社会全体の近代化の趨勢、あるいは建築家の職能のあり方など、より広い視野からユーゲント期のフィンランド建築界を捉えておくことがぜひ必要となる。本論で取り上げる設計競技制度は、そのためのひとつの視点として提示するものである。従ってここでは、彼の作品の建築としての質や性格に関わる議論には、あえて立ち入らない。

2. 活動期区分と活動概略

フィンランド期のサーリネンは、設計事務所を異なった形で3回組織している。1896～1904年のゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所、1905～1906/07年のゲセリウス・サーリネン建築事務所、1907～1923年のサーリネン建築事務所である。共同主宰事務所から次第に単独主宰事務所へ移行していったわけだが、なかでも建築家アルマス・リンドグレン Armas Lindgren (1874～1929) との離反に関しては、彼とサーリネンの建築観の違いが次第に表面化して1904年のヘルシンキ駅の設計競技当選とその後の変更をめぐる確執があったことが知られる⁵⁾。従って、ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所解散の時点までで、サーリネンの活動の

初期がまず区分されうる。

次のゲセリウス・サーリネン建築事務所に関しては、建築家ヘルマン・ゲセリウス Herman Gesellius (1874～1916) は主に事務所運営面に能力を発揮し、サーリネン1人に設計面での主導権が握られていたことが指摘されており⁶⁾、期間の短さも考え合わせて、続くサーリネン建築事務所とまとめて捉えてゆくことが可能となる。

最後のサーリネン建築事務所は、かなり長期に渡る。その期間中にユーゲント期が終わり、第1次世界大戦をはさんで次の北欧古典主義期に至る建築界全体の大きな変化があったこと、サーリネン自身もまたその中で大きく変質してゆくことがあり、これを第1期と第2期に分けて考えてゆくことが妥当であろう。両期を分ける年代としては、サーリネンのユーゲント期の総決算といえるムンキニエミ＝ハーガ地区住宅地計画が正式発表された1915年までを第1期、1916年以後を第2期とみなす。また、1923年のアメリカ移住後のサーリネンは、1930年代頃まで定期的にフィンランドを訪れ、移住以前からの計画などを継続していた。そのためこの時期の作品も、フィンランドと直接関係のあるものに関しては、サーリネン建築事務所第2期に含めて扱うことにする。

以上のような判断から、サーリネンのフィンランドでの活動期およびその作品数は次のとおり区分される。

①1896～1904年

ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所
計80作品
(#1～79)⁷⁾

②1905～1915年

サーリネン建築事務所第1期
計83作品
(ゲセリウス共同期：#80～90／単独活動期：#91～162)

③1916～1923年

サーリネン建築事務所第2期
計49作品
(フィンランド期：#163～204／移住後：#205～211)

各時期の作品数をさらにその種別（実施作品・一部実施作品・設計競技・計画案・スタディ）によって分けると表1となる。

各時期の活動と作品の概略は以下のとおりである。①の初期には、建築学科友人のリンドグレン、ゲセリウスと3人で卒業以前に開設した建築事務所が成功し、特にバリ万国博フィンランド館(#9, #13/1898, 1898)で注目を集め、その後急速に当時フィンランドを風靡していたナショナル・ロマンティズムを建築の面で代表する存在となった。この時期の傾向を代表する作品に、ポホヨラ保険会社社屋(#19, #26/1899, 1899)あるいは国立博物

＜表1＞フィンランド期のE.サーリネンの作品数 [T.ヴァルトによる「作品リスト」をもとに筆者が作成]

活動期区分	設計種別	実施作品	一部実施	設計競技	計 画 案	スタディ	計
①ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所期 (1896～1904)		4 1 (a)	5	1 5 (b)	1 7 (c)	2	8 0
②サーリネン建築設計事務所第1期 (1905～1915)		2 3	5	3 0 (d)	2 4 (e)	1	8 3
③サーリネン建築設計事務所第2期 (1916～1923)		1 0	2	4	3 3	0	4 9
計		7 4	1 2	4 9	7 4	3	2 1 2

(a)作品番号のない作品1を含む (b)のち実施に至る作品6を含む (c)実施部分を伴う計画案1を除く

(d)のち実施あるいは一部実施に至る作品3を含む (e)公的意見陳述1を含む

＜表2＞E.サーリネンの設計競技への応募歴 [T.ヴァルトによる「作品リスト」をもとに筆者が作成]

作品 番号	設 計 競 技 名	所 在 地 (国 名)	競 技 期 間	応募 総数	応 募 案 名	結 果 (金額)	備 考
#1	アレクサンドル3世記念帝立大学 付属美術館	モスクワ (ロシア)	1896.10.1頃-1897.1.10	15	—	審査外	要項違反?
#2-1 -2	J.タルベリの店舗付き都市住居	ヘルシンキ	1896.12.6-1897.3.15	27	"13" "J.T."	1位(800mk) 2位(500mk) 選外	建設(現存) #3
#5	マーケットホールおよび店舗付き 都市住居	タンペレ	1898.3.13-5.16	11	"Toukokuu"	購入(200mk)	
#9-1 -2	1900年万国博覧会フィンランド館	パリ (フランス)	1898.6.23-8.1	18	"Isidor" 不明	1位(700mk) 選外	建設(現存せず) #13
#11	店舗付き都市住居「ヴェルグンデ イ」	トゥルク	1898.6.11-9.15	9	"Viola"	2位(800mk)	
#16-1 -2	フィンランド語劇場主要立面	ヘルシンキ	1898.11.2-1899.1.28	14	"Stella" "Kullervo"	2位(750mk) 選外	
#19	ボホヨラ火災保険会社社屋	ヘルシンキ	1899.2.2-4.30	18	不明	購入(500mk)	変更後建設(現存) #26
#21	市立・公立図書館	トゥルク	1899.2.15-5.15	9	"Thomas"	購入(300mk)	
#28-1 -2	タンペレ貯蓄銀行社屋	タンペレ	1900.1.9-3.15	17	"Cronje" 不明	購入(500mk) 選外	
#50	オーディトリウム・公立図書館・ 博物館用建物	オウル	1902.1.1頃-4.1	12	"Cecil Rhodes" 及び代替案?	1位(1000mk)	
#51	考古・歴史・民族学博物館 (現・国立博物館)	ヘルシンキ	1901.4.30-1902.6.20	15	"Carl XII" 及び代替案	1位(5000mk)	建設(現存) #72
#55	オーディトリウム・公立図書館・ 博物館用建物	オウル	1902.夏?-12	2	—	審査員推薦	#50の第2次招待競技
#70-1 -2	鉄道駅および鉄道管理局建物主要 立面	ヘルシンキ	1903.12.22-1904.4.15	21	"Maapallioia seisova siivekas pyörä(piirretty)" "Semafor"	1位(3000mk) 選外	変更後建設(現存) #79, 106, 112, 138 選外は1位案類似の為
#73	W.ジラルデット邸	ウィーン(ドイツ)	1904.3-6(?)	186	不明	2位(1500DEN)	
#75-1 -2	鉄道駅主要立面	ヴィープリ (現ロシア)	1904.5.22-9.20	26	"Lennätinlankoja (piirretty)" "Festina Lente"	1位(2000mk) 2位(1500mk)	建設(一部現存) #83
#87	平和宮	ハーグ (オランダ)	1905.8.15-1906.4.15	216	"L'Homme"	選外	サーリネン招待参加 (8500mk)
#91	スウェーデン語小学校	ゴッゴラ	1906.11.30-1907.2.15	30	"Konsten i Skolan"	2位(500mk)	
#93	カッリオ地区の小学校および労働 者学級用建物	ヘルシンキ	1906.12.28-1907.3.1	16	"Ispahan"	低位	
#95	ケルットゥリンマキ地区の小学校	トゥルク	1907.8.7-10.15	24	"Saturnus"	2位(800mk)	
#97	学生会館	ヘルシンキ	1907.11.5-11.30	4	"Kultalyvyry (piirretty)"	選外	招待設計競技(700mk)
#98	国会議事堂	ヘルシンキ	1907.10.31(一般公示11. 21)-1908.2.10	18	"Kolmio (piirretty)"	1位(6000mk)	
#99	サラマンドラ保険会社社屋主要立 面	ワルシャワ (ポーランド)	?-1908.春(?)	?	—	2位?	招待設計競技
#107	ケルットゥリンマキ地区の小学校	トゥルク	1908.5-11	2	不明	2席	#95の第2次招待競技 (500mk)
#110	スオミ生命保険会社社屋立面	ヘルシンキ	1909.2.4頃-3.10	4	"Lars Eliel"	2位	招待設計競技
#111	市庁舎	ヨエンスー	1909.4.5-9.1	18	"Joensuun kaupungintalo"	1位(1200mk)	建設(現存) #128
#118	劇場	タンペレ	1910.2.5-4.15	18	"Musta pyörä (piirretty)"	2位(1000mk)	

#121	1913年応用美術・手工芸・美術博覧会会場計画	ヘルシンキ	1910.4.26-5.17	5	"1914"	1位(500mk)	
#122	国際電信連盟のモニュメント	ベルン (スイス)	1909.10.25頃-1910.8.15	92	-	選外	彫刻家E. ヴィクストレムと共働
#124-1 -2	R. フーバー社社屋	ヘルシンキ	1910.5.7-9.15	18	"Ab. Rob. Hub." "Dito"	1位(2300mk) 上位	変更後一部建設(現存) #144
#126	タッリン相互信用組合物	タッリン (エストニア)	1910.11(?) - 1911.1.15	33	"Merkurius"	1位 (750roules)	
#127	市庁舎	ラハティ	1910.12.20頃-1911.3.11	4	不明	1位	招待設計競技(800mk) 建設(現存) #130
#131	ヘルシングフォース・マガサン社港湾倉庫立面	ヘルシンキ	1911.7.12-9.1	24	不明	4位又は5位	
#132	ヘルシングフォース・マガサン社港湾倉庫立面	ヘルシンキ	1911.9.15頃-10.1頃	5	不明	2位	#131の第2次招待設計 (500mk)
#134	リガ第5相互信用組合物	リガ (エストニア)	1911.10.3-1912.1.2	65	"Baitika" 及び代替案?	選外	
#135	都市計画	キャンベラ (オーストラリア)	1911.4.30-1912.1.31	137	-	2位 (750pounds)	
#136	市庁舎	タッリン (エストニア)	1911.夏-1912.3.14	15	"Black and White"	購入	
#137	リガ労働組合のコンサートおよび業務用建物	リガ (エストニア)	? - 1912.3.14	27	"Goldene Leier"	1位 (3000roubles)	
#140	大タッリン都市基本計画	タッリン (エストニア)	1912.9(?) - 1913.3.14	5	"Kolme Leijonaa (piirretty)"	1位 (4000roubles)	
#141	J.V. スネルマン記念碑	ヘルシンキ	1912.5.26-1913.3.31	28	"Snellman"	1位(3000mk)	彫刻家E. ヴィクストレムと共働
#142	市庁舎	ヘルシンキ	1912.7.7-1913.4.30	23	"Vene(piirretty)"	購入2位 (1000mk)	
#147	E.J. アイカラ社社屋	ヘルシンキ	? - 1914.2(?)	3	不明	1位	招待設計競技(1000mk)
#150	王宮	ソフィア (ブルガリア)	1912.夏-12.1(応募案完成)-1914.4.1	-	-	未提出	応募案搬送中に紛失
#152	1915年パナマ・パシフィック博覧会フィンランド館	ワシントン (アメリカ)	1914.6.16-7.15	13	"Nansimo"	1位(400mk)	
#154	国会議事堂	キャンベラ (オーストラリア)	1914.6-1915.3.31 (中止決定1914.10.1)	-	-	-	
#160	噴水	トゥルク	1915.2.4-10.1頃	27	"Aura"	9位又は10位	彫刻家E. ヴィクストレムと共働
#163	G.F. ストックマン社デパート建物	ヘルシンキ	1915.10.1-1916.3.1	28	"Merkur"	3位(1500mk)	
#200	カスル・エル・アイニ病院および医学校	カイロ (エジプト)	1921.春 - 10.3	?	-	第2次審査に残らず	
#202	シカゴ・トリビューン社社屋	シカゴ (アメリカ)	1922.6.10-11.1	約200	-	2位(\$20000)	1922.11.29遅延提出
#206	A. アンデションの都市中心部建物計画	ヘルシンキ	1928.4.25-12.1.	-	-	審査外	招待設計競技(35000mk) 遅延提出

館(#51, #72/1901-02, 1903-04)があり、また住環境への取り組みのきっかけとなったタルベリの都市住居(#2, #3/1896-97, 1897) およびその後の都市住居ウーロフスボリ(#34, #49/1900-01, 1902)とエオル(#37/?-1901)、さらに郊外住宅スール・メリヨキ(#45/1900-03)とヴィトレスク(#48/1901-02)などがある。そして、社会的にも大きな関心を集めたヘルシンキ駅の設計競技(#70/1903-04)にも、当選するに至るのである。〈表1〉より明らかのように、以後の時期にも増して実施作品の数も多く、非常に精力的な活動が展開されたのが初期である。

ところがサーリネンらは、その絶頂期とも言える時期に、ヘルシンキ駅設計競技当選案の変更をめぐる問題で共同事務所を解散してしまう。②の中期は、まず短いゲセリウスとの共同事務所期を経た後に、サーリネンは本格的に単独で設計活動を始め、国会議事堂設計競技当選案(#98/1907-08)、ヨエンスー市庁舎(#111, #128/1909, 1910-11)、ラハティ市庁舎(#127, #130/1910-11, 1911)、ヴィープリ駅の建設(#83, #105/1905, 1908-?)などで単なる民族主義にとどまらない後期ナショナル・ロマンティシズム建築を確立する。長期に及ぶ設計変更(#79, #106, #112, #138/1904-09, ?-1908, 1909-11, ?-1912)の末に

ヘルシンキ駅を完成させて、国際的な評価も集めた。一方で住宅地や都市規模での計画にも積極的に関わり、一連のヘルシンキ中心部商業地区再開発と道路計画(#103, #114, #139, #144/?-1908, ?-1909, ?-1912, 1913)、キャンベラの都市計画(#135/1911-12)、ムンキエニエミ=ハーガ地区住宅地および大ヘルシンキ計画(#157/1910?-15)などを次々と発表した。引き続き実施作品も設計競技応募案も多く、充実した活動期だったのが中期である。

ところが③の後期に至ると、フィンランドは第1次世界大戦やその後の独立をめぐる内戦などが続く時代を迎え、ユーゲント期も終焉を告げる。サーリネンは世情が一応の安定を取り戻してから、壮大なカレワラ・タロ計画案(#197/1921)などのプロジェクトを作成するが、実施に至った作品は少なかった。〈表1〉を見ても、実施見込みのない計画案ばかりが目立ち、後期は不毛の時期だったといえる。そして、シカゴ・トリビューン社社屋の国際設計競技応募案(#202/1922)が2位となってアメリカで高く評価されたのをきっかけとして、50歳で活動の場をフィンランドからアメリカへと移すことになる。ただし、継続していた大ヘルシンキ計画(#180/1916-18)やヘルシンキ中心部の改造計画(#205, #208/1927, 1930

-31)といった国内の計画にはその後も関わり続ける。

3. 設計競技：タルベリの都市住居

建築家サーリネンの①の時期の初期活動に関して特徴的なのは、非常に若くして設計実務へ取り組み始め、しかもすぐに建築界の中心的存在となった事実である。ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所の設立は、彼ら3人がまだフィンランド・ポリテクニク建築学科在学中の学生であった1896年12月のことであった⁸⁾。そして仕事量の増加とともに、1901年の段階で事務所は11人の所員(うち4人は学生)を抱えるまでになる。この数字にはインテリア関係の協力者などは含まれていないとされ、実質的な作業従事者はおそらく15人を越えていた⁹⁾。そして、1904年の解散に至るまでのゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所の活躍は、まさに時代の寵児ともいえるべき様相を呈する。この時期のサーリネンは、弱冠23〜31歳にあたるのである。

序で述べたように、本論では彼らの建築作品の質や性格に関わる議論にはあえて入らず、建築家としての機能に関わる視点から論じる方法をとる。彼らが若くして活躍できた理由のひとつとして、フィンランドにおける設計競技制度について着目するのである。〈表1〉からわかるように、彼らは設計競技への参加に活動の多くの時間を割いていた。そこでさらに、「作品リスト」をもとにサーリネンの全活動期を通じての設計競技への応募歴をまとめたものが〈表2〉である。これによれば、初期のゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所はその約8年の活動期間中に、15の設計競技に21の応募案を提出し、1位6回、2位5回、購入4回、審査員推薦1回という好成績を収めている。しかも1位当選6案のうちの5案(#2-1, #9-1, #51, #70-1, #75)と購入1案(#19)が(場合によっては大きく変更を伴ったが)実際に建設されて、彼らのこの時期の主要作品の一部をなしている。彼らにとっての設計競技の重要性は明らかである。

彼らの早すぎるかに見える設計事務所設立に関しても、〈表2〉からその間の事情が推測される。すなわち、彼らの応募した最初の2つの設計競技の競技期間に注目してみるなら、1896年12月の事務所設立はまさにその応募案作成の時期と重なるのである。モスクワに建つアレクサンドル3世記念帝立大学付属美術館(#1/競技期間：1896.10.1.頃-1897.1.10.)は、図面が失われているが、おそらく応募要項違反があって選外となったとみられる。一方、実業家タルベリのためのヘルシンキ市内の店舗付き都市住居(#2/競技期間：1896.12.6.-1897.3.15.)では、提出した2つの応募案「13」と「J.T.」がそれぞれ1位と2位に入選することになった〈図1〉。事務所開設から数カ月後、わずか2つめの設計競技への応募であげた成果だった¹⁰⁾。確かな経済的基盤など当然有さな

いはずの若い彼らが建築事務所を設立したのは、設計競技を通じて仕事を得るというフィンランド建築界における建築家の新しい職能のあり方が、そこに予定されていたからに他ならない。

タルベリの都市住居の場合、これが公共建築でなく一実業家の私的住宅の設計競技だった点がさらに特徴的である。ユリウス・タルベリ Julius Tallberg (1857〜1921)は、近代社会黎明期のフィンランドにあっていわば立志伝中の人物だった。若くして建設関係資材を扱う小商店の経営に成功し、みずから生産工場を所有し、さらに運輸会社や建設融資銀行の設立にも加わる。1900年頃以降は港湾計画や住宅地開発、商業地区再整備にも進出し、最終的には市当局と協力して全ヘルシンキを対象にした未来計画の立案まで行うのである¹¹⁾。

遠大な計画を当初から胸に秘めていたタルベリが、有能で若い建築家を協力者として求めており、それゆえに自邸建設に際してあえて設計競技に付してみたことは容易に想像されうる。実際これ以後のタルベリは、彼のヘルシンキ構想の中心となるヘルシンキ駅周辺の商業地区再開発計画(#114/計画：?-1909.7./建設：1909.夏-1910.秋)やムンキニエミ・ハーガ地区の大郊外住宅地計画(#157/計画：1910?-1915.秋/発表：1915.10.)などを、もはや設計競技を経ずにサーリネンの手に委ねることになるのである。ここに見出されるタルベリとサーリネンの関係は、建築趣味の好事家の施主とそれに応える建築家といったものではなく、近代社会のなかでの事業家とその協力者としての建築家というダイナミックなものになっている。それまでのフィンランドにはなかった建築家のありかたが、ここに示されている。サーリネンはそのきっかけを、設計競技を通じて得たことになる。

〈図1〉タルベリの都市住居/南側立面図(実施図面・1897年6月)
【所蔵：フィンランド建築博物館図面コレクション】

4. 設計競技：パリ万国博フィンランド館

続いて注目されるのは、1900年パリ万国博覧会フィンランド館のための設計競技(#9/競技期間：1898.6.23.-8.1.)である。ナショナル・ロマンティシズム文化運動の興隆のさなかに、設計競技は広い一般市民の関心を集めて行われ、ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所は提出した2案のうち、「Isidor」と題された案で第1位を獲得した。そして完成したフィンランド館は、サーリネンらのナショナル・ロマンティシズム建築家として第一歩を飾る作品となったのである(図2)。

すでに本論文で使用してきているナショナル・ロマンティシズム Kansallis Romanttiikka なる概念について、説明を加えておく必要がある。まずこれは建築分野のみならず、ユーゲント期の北欧文化一般に通底していた発想で、文学・音楽・芸術一般など広い分野が参加した総合的文化運動を形成した。ただし、この理念の起源は文化活動に直結したものではなく、むしろ19世紀前半の北欧を風靡した社会思潮であり、さらに影響源をたどれば中・東欧にその先行例が見られるという。一般に「同じ言語を用いている人びとは1つの民族をなしている」であり、民族は国家を形成することができる」という考え方で、北欧に民族的覚醒と解放運動を生み出す原動力となったものと説明される¹²⁾。

これが遅れて新しい民族文化の創造をめざす運動の基本理念へと展開し、用語もそのまま援用されることになった。すなわち、19世紀も終わりに近づきヨーロッパ北辺の地にもようやく近代的な文明社会が本格的に根づいた頃、北欧の人々はようやくみずからのアイデンティティの確立に目覚める。その結果、ヨーロッパ中心諸国の文化に追従するだけのそれまでの姿勢を改め、祖国の伝統に根ざした民族文化を近代的に再創造しようとする発想が、彼らの心を強く捉えた。ここに、ナショナル・ロマンティシズムの文化運動がスタートし¹³⁾、建築もその一翼を担うことになったのである¹⁴⁾。

フィンランド館は博覧会が終了すれば取り壊される仮設建築ながら、ちょうどこの時フィンランドが経験していた大きな政治的変動とも関連して、まさにナショナル・ロマンティシズムの発露といえるような建築表現が強く望まれていた¹⁵⁾。この設計競技を獲得し、フィンランド国民の多くの期待に応えるフィンランド館を実現させたことの意味は非常に大きかった。ここでゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所は、フィンランド建築界においてナショナル・ロマンティシズム建築家として認知されるための基盤を得たのである¹⁶⁾。

事実、彼らはこの後、ナショナル・ロマンティシズムのシンボルともいうべき建築(しかも仮設ではない)であるヘルシンキの考古・歴史・民族学博物館(現・国立博物館)の設計競技(#51/競技期間：1901.4.30.-1902.

6.20.)にも当選することになる。この時期のフィンランドでは、国家の独立をめざす社会の大きな動きのなかで公共建築の建設計画が相次ぎ、そのほとんどすべてが設計競技となった。ナショナル・ロマンティシズム建築と呼ばれる様式は、その一連の設計競技の中で育てられ次第に形を整えてゆくのだが、ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所の作品群こそは、まさにその典型例だったのである。ただし、3人での共働の最後を飾る大作となったヘルシンキ駅の設計競技(#70/競技期間：1903.12.22.~1904.4.15.)では、彼らの民族主義的建築表現が論議を呼び、それが共同建築事務所の解散へと結びついてゆく。

＜図2＞万国博フィンランド館/立・断面図(実施図面・1898年9月)

【出典：Hausen, Mikkola, Amberg, Valto, et al.
"Eliel Saarinen - Projects 1896-1923", pp.86-87.]

5. 設計競技制度とユーゲント期の建築家

一般に、フィンランドにおける建築家の職能は、19世紀後半に国内での建築教育が開始され、さらにユーゲント期に至って設計競技制度が導入されることで確立されたと考えられる。

フィンランドにおける建築教育制度は、ヨーロッパとしては開始が大きく遅れ、また当初から建築が工学の一分野と位置づけられていた点に特徴がある。まず工学全般の定着がかなり遅れており、19世紀半ばになってようやく今後の社会発展を支えるべく工学の研究・教育体制の整備が決定された。その一環として建築家も養成され

ることになったのである。1849年からヘルシンキの工学実業学校 Helsingin Teknillinen Reaalkoulu において開始された工学教育のなかに建築も加えられたのは1863年のことだった。建築家W.L.ペーアが教官として招かれ、1868年までに4人が卒業して国内で正規の建築教育を受けた最初のフィンランド人となった。教育が軌道に乗るのは、1872年の改組により工学実業学校がフィンランド・ポリテクニック Suomen Polyteknillinen Opisto となつてからである。この際に当時の代表的建築家 F.A.シェーストレムが主任教官に任命され、さらに1885年からは彼の弟子G.ニストレムに引き継がれ、フィンランドの建築教育は確立される¹⁷⁾。

一方、設計競技制度の確立に関しては、1892年設立の建築家クラブ Arkitektklubben が重要な役割を果たしたことが知られる。これは1880年に設立されていたフィンランド工学協会 Tekniska Föreningen i Finland のなかにつくられた建築部会で、クラブと名づけられているが同好会あるいはサロンの組織ではなく、会合によって建築界の動向を左右する重要な決定をなす役割を与えられていた機関だった。(後にこの建築家クラブが改組されて、現在のフィンランド建築家協会となる。)そしてユーゲント期に建築家クラブの行った重要な活動として、1903年4月の建築専門機関誌『建築家 Arkitekten』¹⁸⁾の創刊と並んで、建築設計競技を実施し監理するうえでの役割があった。フィンランド建築界において現在にいたるまで機能し続けている設計競技制度は、この時期に基礎が築かれたものである。

ユーゲント期に至ると、国内の建築教育制度も着実に卒業者を生みだし、多くの若い建築家が出現した。それまで一部の経験を積んだ建築家たちにほぼ独占されていた公共建築に加え、量的に急増してきた一般の都市建築も含めて、仕事の機会をすべての建築家に解放することが必要となってきたのである。こうした事情のもとに建築家クラブで議論が重ねられ、基本的にすべての公共建築は設計競技にゆだねること、その他の一般建築も建築クラブの協力によって可能な限り設計競技とすること、審査には建築家クラブ選任の審査員(建築家)が必ず加わること、競技後に当選案は公表されて図面が建築博物館へ保存されること、などが決定された¹⁹⁾。

フィンランドで初めて建築家クラブの監理下で行われた設計競技は、トゥルクのミカエル教会のためのものだった(競技期間:1893.5.-1894.5.1.)。この競技では、まだ23歳の建築学科学生だったラーシュ・ソック Lars Sonck (1870~1956)が多くの有力建築家たちを抑えて当選した。この結果に対しては、多くの反論が寄せられ一時事態は紛糾したが、それでも建築家クラブは譲らず、最終的にミカエル教会の実施設計は若いソックに委ねられることになった²⁰⁾。本論文で扱ったタルペリの都市

住居の場合もまた、設計競技の主催者としてタルペリ自身と並んで、建築家クラブが名を連ねていた²¹⁾。その他ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所が設計競技を獲得した作品としてすでに言及したヘルシンキの考古・歴史・民族学博物館(現・国立博物館)の場合は、すでに設計者が選定されていたにもかかわらず、その後の若い建築家たちの活動によって設計競技に持ち込まれたことが知られている²²⁾。ユーゲント期の建築家たちにとって、設計競技が大きな武器となったことが、これらの事例からはっきり窺える。

ユーゲント期の建築は、建築界の新しい体制に支えられて、若い世代の建築家たちを中心として展開されてゆく。彼らは、まずポリテクニックにおいて専門教育を受け、次いで社会に出て数多く行われる設計競技に参加する。そして、それに当選することで作品を得て建築家としての地位を築き、あるいはその審査結果の適否をめぐる議論することで建築界を変革してゆく。建築家全般にあてはまる行動様式が、ここではっきりと確定されていると言ってよい。これによってユーゲント期の建築家は、それ以前の建築家とは異なった社会的存在として位置づけられている。フィンランドにおける近代的建築家の出発点をここに見定めることができよう。

ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所の3人は、まさに新世代のあり方を示す典型的建築家として建築界に出現した。あまりにも若い時期の設計事務所の開設にしても、決して単なる若さの暴走などではなかったことを、ここで指摘しておきたい。

6. 結

建築家エリエル・サーリネンの活動とその作品は、彼を取り巻く社会や建築界の環境によって確実に支えられていた。建築家の存立基盤に関係する部分で、ユーゲント期に特筆すべきいくつかの変化が起こっていたのである。そしてこれはまた、結果的に都市の発展を促し、ナショナル・ロマンティシズム建築を出現させる基盤を用意する役割も果たした。

サーリネンの初期活動の場合、設計競技は特に重要な意味をもっていた。タルペリの都市住居とバリ万国博フィンランド館の2つの対照的な例が、それを示している。前者においては、彼は実業家タルペリとの協力関係によって成長著しい近代都市ヘルシンキの商業空間や住空間の構成に取り組む手がかりをつかんだ。一方後者では、ナショナル・ロマンティシズムの民族主義的表現を行う代表的建築家として地位を固める基盤を得たのである。異なった2つの方向へ建築を展開する可能性を、彼は共に初期の設計競技を通じて獲得したことになる。

建築の近代性と民族性というサーリネンが追求した2つのテーマについて、その中期以降の展開を予見させる

のが、ゲセリウス・リンドグレン・サーリネン設計事務所がその共同期の最後に獲得した2つの大きな設計競技、考古・歴史・民族学博物館とヘルシンキ駅であった。ナショナル・ロマンティシズムのシンボルともいえる建築の前者のみならず、むしろ近代都市のなかでの機能を重視されるべき後者までが、純粋な民族主義的表現によって当選したことで問題が発生する。これが建築界に大きな論議を巻き起こし、結果的に共同建築事務所は解散して、博物館はリンドグレンの手に引き継がれて1905~10年にナショナル・ロマンティシズムの典型的表現によって建設される。一方、駅はサーリネンによって大きく設計変更されて、より近代的な姿となって1919年に完成するのである。

こうした展開のなかに建築家サーリネンの活動と作品の性格を検証してゆく作業が、さらに必要となろう。ここでは建築家の職能といった視点とは別に、建築家の理念や建築作品の質に立ち入った議論が必要となってくるが、これは次回以降に稿を改めて論じたい。

<注>

- 1) Jugend という語形は本来フィンランド語には存在せず、ドイツ語から借用されている。また百科事典の項目などには Jugendtyyli なる表記もある(例えば "Uusi Tieto Sanakirja")。tyyliは「様式」の意のフィンランド語なので、全体で「ユージェント・シュティル」となる。この点から、フィンランド世紀末文化は大枠としてドイツ系に類するものとしてフィンランド本国で認識されていると類推される。なお、フィンランドまたは北欧固有の用語であるナショナル・ロマンティシズムとの関係については、注14)参照。
- 2) Albert Christ-Janer, "Eliel Saarinen - Finnish-American Architect and Educator", Chicago, 1948/1979. 本文ではサーリネンの活動と作品が、フィンランド時代の第1部とアメリカ移住後の第2部に分けて記述されているほか、巻末の研究文献リストや作品リストも1970年代までに刊行された研究文献のなかでもっとも充実している(例えば、1979年増補版では、フィンランド期の作品としてリストに88を掲載)。そしてなによりも、晩年のサーリネンに親しかった著者が本人の全面的協力を仰いで、本文中に本人へのインタビュー内容なども織り込みながらまとめあげたものである点が、この本の価値を高めている。しかし特に本文の内容は、おそらく本人の意図を反映させたため、むしろかなり偏向が感じられるものになっている。すなわち、外国で手がけた作品は必要以上に詳しく扱われている一方で、ナショナル・ロマンティシズムの民族色の濃い作品がほとんど説明から省かれている。ナショナル・ロマンティシズム期の重要作品であるボホヨラ火災保険会社や考古・歴史・民族学博物館(現・国立博物館)、それにヘルシンキ駅設計競技の当選案とその修正に至る過程が、この著書では(作品リストを別にして)まったく登場しない。このクリストジェナーの著が、英語で読めるほとんど唯一のサーリネンのまとまった研究書であった時期がかなり長く続いたことが、サーリネンに対する一般的な評価をゆがめる大きな原因となった可能性は否定できない。
- 3) Marika Hausen, Kirmo Mikkola, Anna-Lisa Amberg, Tytti Valto, et al, "Eliel Saarinen - Projects 1896-1923", Helsinki, 1990. また1983~84年の展覧会にあわせて、同様の構成の簡略版の展覧会カタログが刊行されたが、こちらには作品リストは掲載されていない。Marika Hausen, Kirmo Mikkola, "Saarinen in Finland", Helsinki, 1984. および Anna-Lisa Amberg, "Saarinen's Interior Design", Helsinki, 1984. なおアメリカ期のサーリネンに関しても、同時期に大部の研究書がまとめられている。"Design in America - The Cranbrook Vision 1925-1950", New York, 1983.
- 4) Hausen, Mikkola, Amberg, Valto, et al, op.cit., pp.249-342. このリストに掲載された作品群は、同一建物でも設計競技段階と実施計画段階を別作品として扱い、実施作品・計画案・設計競技応募案・スタジオなどに分けられ、総計212に及ぶ(アメリカ移住後にフィンランドで継続した作品を含む)。そのすべてには基本的に設計年代順の作品番号が与えられ、各作品ごとに所在地・当初様態(構造・面積・部屋配置・他)・施主・設計分担者・設計期間・施工者・施工期間・後の増改築・補注・掲載刊行物・図面所蔵場所・情報ソース(以上実施作品の場合)、あるいは計画場所・計画様態(構造・面積・部屋配置・他)・設計分担者・設計期間・設計結果・設計主催者・後の建設・補注・掲載刊行物・図面所蔵場所・情報ソース(以上設計競技の場合)、などの詳細なデータが集められている。その他、専門の立場や委員会メンバーとしての公的助言、コンサルタントとしての提案などのリスト、サーリネンが不明確な作品のリストも添えられている。なお、サーリネンのインテリア・家具・絵画などの作品リストは、ヴァルト編のリストとは別項で掲げられている。ibid., pp.221-248.
- 5) 初期のサーリネンと共働した建築家リンドグレンに関しては、サーリネンと袂を分かった後もユージェント期を通じてサーリネンに劣らぬ重要な役割を果たした建築家とフィンランド国内では認識され、研究も行われている。例えば、Riitta Nikula, "Armas Lindgren 1874-1929 arkkitehti", Helsinki, 1988. など。
- 6) Christ-Janer, op.cit., pp.14-15.
- 7) ヴァルト編の「作品リスト」において各作品に付されている作品番号。但し①の時期に関しては、リストの#15と#16の間に番号のない作品がひとつ挿入されており、これも含めると#1~79で計80作品となる。また、以下の本論での個々の作品への言及で作品番号の後に付した年代は、特に記さない限り、実施作品は設計期間、設計競技は競技期間を示す。
- 8) 3人の卒業は1897年5月で、その後もサーリネンとゲセリウスは1898年春まで、ポリテクニクでの師にあたる教授グスタフ・ニストレムの民間設計事務所でもドラフトマンとして働いている。またリンドグレンは、1899年秋から1900年春にかけて古代遺物委員会でセクレタリー、1899~1901年に母校ポリテクニクの美術史の講師を務めた。さらに1902年秋からは、応用美術中央学校の校長にも就任している。これらの活動の一方でゲセリウス・リンドグレン・サーリネン建築事務所での設計活動を行っていたことになる。(Hausen, Mikkola, Amberg, Valto, et al, op.cit., p.254.)
- 9) Hausen, Mikkola, op.cit., p.52.
- 10) タルベリの都市住居は、設計競技後に1897年6月までに主要実施図面がサーリネンらの手で作成され、1898年秋までに建設された。その後、内部の一部改修や門及び付属屋の増築などが行われたが、全体としては当初をよくとどめた姿で、カタヤノッカ地区に現存している。軀体は煉瓦造4階建て(地下なし)で、1階に店舗その他、2~4階に各1世帯(335㎡)の住居が割り当てられた。当初の入居者としてタルベリ自身のほか、フィンランドの代表的画家アルベルト・エーデルフェルトと代議士オスカル・イリングの名が記録されている。(Hausen, Mikkola, Amberg, Valto, et al, op.cit., p.255.) 外観は、黒いスレート屋根と暗黄色のブラスター壁面からなり、道路側のベースメントのみ花崗岩で仕上げられている。急勾配の屋根や破風、それに小塔の林立はネオ・ゴシック的な印象を与え、バラベットの狭間胸壁を模したような処理も中世城砦を思わせる。一方、窓まわり装飾には古典主義的な感触が残されている。壁面の湾曲などには当時のアル・ヌーヴォーの影響も見とれる。全体として、新旧の造型モチーフがややぎこちなく共存している作品と評せよう。

- 11) タルベリに関しては、E.Ginström, "Julius Tallberg och Hans Verk", 1930. が知られる。ただしここの経歴は、主に百科事典 "Uusi Tieto Sanakirja" の項目 "TALLBERG, Mathias Julius Hjalmar" の記述による。
  - 12) 百瀬宏, 『北欧現代史』, 山川出版社, 1980, p.81.
  - 13) ナショナル・ロマンティズムを総合的文化運動として捉えた研究に次の2例があるが、いずれも表題中でこの時期をフィンランド文化の「黄金期」と規定している。István Rácz, Sakari Saarikivi, "Suomen Taiteen Kultakausi 1860-1930", Helsinki, 1971. および John Boulton Smith, "The Golden Age of Finnish Art - Art Nouveau and the National Spirit", Helsinki, 1975/1985. また、1970年代前半にストックホルム、ニュルンベルク、ブリュッセルの各都市でいずれも「フィンランド・1900」と題された展覧会が開催されている。
  - 14) ナショナル・ロマンティズム建築に関しては、フィンランド国内では多くの研究がなされてきている。初めてナショナル・ロマンティズム建築を歴史的研究対象として設定したウィックベリの先駆的論文が、Nils Erik Wickberg, "Tunnelmia ja Pyrkimyksiä Suomen Rakennustaiteessa Vuosisadanvaihteessa", "Arkkitehti-Arkitekten", 3/1956, pp.33-38. その後の研究例としては、Anna-Lisa Amberg, "Jugend ja Kansallisromantiikka", "Helsinki-Seuran Vuosikirja 1972-73", pp.37-51. あるいは Ritva Tuomi (Ware), "Kansallisen Työlin Etsimisestä", "Abacus I", Helsinki, 1979, pp.57-96. など。ここで、本論で用いる「ユーゲント」と「ナショナル・ロマンティズム」の関係を整理しておく。まず分野としては、前者が建築を中心とした概念なのに対し、後者は広く文化一般を含む。逆に性格づけに関しては、前者が広い視野からヨーロッパ世紀転換期との共時性を強調するのに対し、後者においては国内事情ゆえの固有性が主張される。特にこの建築としての性格づけは、フィンランド建築の近代化過程と関連して重要な問題で、多くの場合同一の建築家のなかに、ヨーロッパ世紀転換期の建築家としての意識とフィンランドの民族主義建築家としての意識が共存していた。これに関しては、稿を改めて論じたい。
  - 15) 当時のフィンランドはまだ正式の独立国ではなく、ロシア皇帝の支配下にある大公国のひとつにすぎなかった。1898年にフィンランドが来るべき万国博覧会で単独で展示館を持てることが決まったが、その翌年にはいわゆる第1次ロシア化政策が始まり、ロシアの領土内異民族統治の基本姿勢が自由放任から抑圧へと変化する。その厳しい状況のなかで、フィンランド側の努力と国際世論の後押しで、フィンランド館の独立運営の権利は一応守られた。ただし、展示館入口には「ロシア館フィンランド分館」と明示することが義務づけられ、展示内容にも制限が加えられた。フィンランド館には文化・芸術関連の展示品のみが許され、工業製品などはフィンランド製であってもロシア館の方に展示されることになったのである。しかし、この制限が逆に効果を生み、フィンランド館はまさにナショナル・ロマンティズム文化の展示を通じて、みずからの民族的アイデンティティを世界に訴えるための舞台と化した。(Smith, op.cit., pp.125-133.)
  - 16) フィンランド館は、設計競技当選案をもとに1898年8~9月に実施図面が作成された。1899年春からフィンランドで木造軸組部分を組み立て、一度解体してバリーに船で運び、8~9月に会場の敷地で再度建て上げるという方法が採られた。最終的には、1900年4月15日の博覧会開会に間に合うように完工している。壁には「コロリット」と呼ばれる特殊シートと石膏プラスターで固められた布地が貼られて組積造を模し、エントランスの周囲のみに実際の石材(主要エントランスのみ花崗岩、他は軟石)が用いられた。屋根はシングル葺きである。全体は、天井の高い中央ホールを中心として、その両側にスカイライトのある東西展示室がつながった単純な平面構成をもつ。325㎡の展示空間に、40㎡のバルコニーが付属する。(Hausen, Mikkola, Amberg, Valto,
- et al, op.cit., pp.258-259.) 建築の全体にはフィンランドの伝統的中世石造教会との類縁性が見られるが、同時にアメリカの建築家H.H.リチャードソンの作品からの影響も指摘できる。この展示館を強く特徴づけているのは、むしろ自然の中からとられた動植物のモチーフが生み出す独特の装飾性であろう。正面エントランスや塔基部にはクマ、反対側エントランス付近にはリス、塔屋根にはヘビ、東西展示室屋根にはカエルといった動物が、さらに随所に松カサ、野苺、蔓草、睡蓮といった植物が、具象的な形のまま建築に貼りついているのである。このフィンランド館はオール・ヌーヴォー全盛のバリーで大変新鮮な印象を与えたようで、「博覧会場の真珠」あるいは「議論の余地なくもっとも簡素かつもっとも美しい展示館」などといった賞賛を得た。(Smith, op.cit., p.133.)
- 17) Arkkitehtiosasto(ed.), "Arkkitehtikoulutuksen Vuosikymmenet 1872-1976", Otaniemi, 1976, p.5. 教官を務めたシェーストレンやニストレンをはじめそれまでフィンランドで活動してきた建築家は、すべて外国(主にスウェーデンの王立建築アカデミー)で教育を受けてきた建築家であった。なおフィンランド・ポリテクニクは、1908年に工科大学 Teknillinen Korkeakoulu に再改組されて、第2次世界大戦後に郊外のオタニエミに移転して現在に至っている。
  - 18) 創刊当初は年9回発行され、建築界の動向や設計競技の結果、新たに完成した作品の紹介、さらに外国の話題なども随時掲載して、当時のフィンランド建築界のもっとも重要な情報媒体となった。特に、まだ外国雑誌の個人的入手が容易ではなかったユーゲント期において、この『建築家』誌上を飾ったH.P.ベルラー、H.ヴァン・ド・ヴェルド、J.ホフマン、それにH.タウンゼント、R.ノーマン・ショウなどのヨーロッパ各国の建築家の作品群は、フィンランドの建築家に少なからぬ刺激を与えたものと思われる。なお同誌は、1903~1919年はスウェーデン語で「Arkitekten」として発行され、その後1920~51年にはスウェーデン語の「Arkitekten」とフィンランド語の「Arkkitehti」の双方が同内容で同時に発行され、1952~68年に「Arkkitehti-Arkitekten」の誌名で2カ国語並記の形となり、1969年以降フィンランド語のみを主に使う「Arkkitehti」となって現在に至っている。
  - 19) 建築家クラブでの一連の議論の内容は、『建築家 Arkitekten』誌、およびその前身である『フィンランド工学協会会報 Tekniska Föreningens i Finland Förhandlingar』誌に掲載されている。
  - 20) Paula Kivinen, Pekka Korvenmaa, Asko Salokorpi, et al, "Lars Sonck 1870-1956 arkkitehti", Helsinki, 1981, pp.34-35. 建築家ソックは、このミカエル教会をきっかけとして、サーリネンと並び称されるナショナル・ロマンティズムの中心的建築家に成長してゆく。
  - 21) Hausen, Mikkola, Amberg, Valto, et al, op.cit., p.254.
  - 22) 1899年の段階で、建築家H.リンドベリによる折衷主義の計画案がすでに提出されていた。リンドグレンとソックを含む5人の建築家が設計競技を経ない建築家選定に対して抗議書『われらの博物館』(H.Gesellius, B.Jung, A.Lindgren, H.Neovius, L.Sonck, "Vårt Museum", Helsinki, 1900.)を発表し、最終的に設計競技によって新たに計画案を募ることになった。

(1995年6月7日原稿受理, 1995年10月2日採用決定)